

# 孔子像解説

神奈川 安田靱彦氏藏

我國の釋奠は大寶元年二月に初めて行はれたと云ひ編田、孔子の畫像は吉備

眞備が弘文館の圖を齎して太宰府學業院に置き、百濟畫師をして之を寫さしめて大學寮に備へたと傳へてゐる江家次第。爾來室町に永く中絶するまで大學寮の釋

奠は概ね春秋二季に行はれてゐたものと考へられると共に、之に用ひた畫像の傳存も或程度までは辿られるもの、如くである。即ち元慶四年巨勢金岡が寫し

たと云ふ先聖先師九哲の像があつて、延久四年にそれに修補が加へられ江家次第、仁平三年にはなほ是が用ひられてゐた台記同年八月八日の條。のち安元三年四月の大學寮の

火災には孔子影は取出したとあり、建曆二年三月には書寫の爲に大學寮の像が用ひられたと云ふ。このほか早く天長十年に加賀國に命じて先聖先師像二條を

畫かした事も見えて以上故事類苑釋奠の項參照、他にも畫像製作の盛だつた事を知るが、併し古像の傳存するものは甚だ稀である。恐らくはかの玄證本先德圖像帝室傳物館藏中

の一圖の如きが從來知られてゐる殆んど唯一の例ではなからうか。而もこの圖卷は密家が三國祖師の影供の用に充てたものであると云ふから、その圖様は或

は一般のそれとは多少系統を異にするものかとも思へるが、當否は知らず、栗原柳庵はこの像を評して「大異于世所傳而却與大學寮本似同矣」題跋備考と述

べてゐる。それは獸脚の几による正面向の坐像で、事實大陸の所謂李龍眠本などと云ふものと或る連絡を辿るべきものかも知れぬ。

いま茲に掲げられた安田家の畫幅を是と比較するに、同じい正面向の坐像で、几にも獸脚の名残かと思へる形が見えるが、唯彼が蒲葵扇様のものを手にする

のに對して持物なく且つ相貌にも一種森嚴な表情のあるのが大いに異つてゐる。この威相ある點は一には甚だ雄偉だつたと云ふ孔子その人の風采の所傳を思浮

べさせ、一には上代の神像の表情の扱方に通ふ所があるとも見られて、或は却つて彼よりも更に古態を存するかの感がある。齒を露すことは後世の孔子像に屢々見るが、之がその例に洩れない點も注意される。異様な像容ながら古傳の孔子像の二型を示すものと信じて略疑ないのではあるまいか。

色紙型の賛文は著しく剝落し、また入墨の跡も著しいが此幅に添つてゐる近代の點書などを參考して大體左の如くに辿られる。

孔子字仲尼、魯昌平邠人、其父孫陬梁紇、其母顏氏女、洙泗之教誨、三千之大師、智是如日月、性又受忠和

長九尺六寸、壽七十三歲、魯襄公世生、魯哀公時卒、累代專尊歷、二季必釋、唐宗、追贈文宣王

和文と思ふが、基く所は未だ考へ得ない筆者傳稱は世尊寺定成である。像は相當強い打込のまゝ、或る太さと弾力を失はず、而も悠揚とした筆線を以て大體を終始し、かなり強い暈を添へ、牀座の木理を詳かにするほかは現在殆んど衣文にも文様らしいものを見ない極めて明快な畫法である。かゝる用筆竝に賦色法は、藤原期の一部の佛畫肖像と系を同じくするものであるが、本圖の

それは殊更に簡淨にして而も敢て迫らず、よく雄渾深厚の致を保つところ、一の代表的な作例とすることが出来る。左右に侍する人物の姿にも藤原風の多分に存することは特に云ふまでもない。唯贊の書體にやゝ時代の下の事を感じしめるものがあるから彼此見合せて大體鎌倉前期頃の製作と見るべきであらうか。

かゝる本圖の畫格は更に、いま之が我國孔子畫像の最古例の一であるとすれば、その圖様其他になほ考ふべき幾多の問題を存してゐるには相違ないが、今は凡てを後考に譲つて以上の簡單な省察のみに止めた。

因に倭錦邦隆の條に「一孔子像詞世尊寺藏南都宮什物」なる記載が見え、先人の多くが本圖を是に當るものと鑑してゐる本圖添狀。若し果して然りとすればかの大乗院尊尊

の本尊目六美術研究第五八號に孔子孟子顔回の影各一鋪を擧げて「讚峯殿御筆 一條殿本尊」とあるのも或は何かの參考となるかも知れぬ。氣附くまゝに附記して置く。

尊」とあるのも或は何かの參考となるかも知れぬ。氣附くまゝに附記して置く。

尊」とあるのも或は何かの參考となるかも知れぬ。氣附くまゝに附記して置く。

尊」とあるのも或は何かの參考となるかも知れぬ。氣附くまゝに附記して置く。